

広島別院だより

Vol.28
冬号

真宗大谷派（東本願寺）
広島別院教化委員会 発行

報恩講が勤まる

昨年十二月四・五日に亘り報恩講が勤められました。報恩講は親鸞聖人の三十三回忌以来、七百年間、東本願寺や全国の別院、寺院、家庭で毎年、勤められております。

この度の講師は芸備組西願寺（庄原市）住職寺川大雅師が務めました。以下、法話の抄録です。

● 莊嚴の意味

報恩講などの仏事の時、仏前に華・香・灯などを供える。それらを莊嚴（しょうごん）といい、それぞれ私たちに大切なことを教えている。移ろいゆく仏華を見てはいのちの諸行無常を想い、香の薫りで教えが伝わる平等性に触れ、灯によって暗い迷いを破る教えによって安心が与えられる。たった三つの莊嚴ではあるが、釈尊以来受け継がれた教えに遇う意味を表している。いわば、自分の手でしたこと

に自ら手を合わせるのである。そこに、如来と私との深い縁が結ばれていく。莊嚴とは、いのち・平等・安心という仏教が内包している教えに出遇うための表現なのである。



講師：寺川大雅師

● 仏事によって育てられる私

仏事への私たちの態度は、仏・法・僧の三宝に帰依する、つまり仏さまと、その教えと、教えに生きる人々を大切に敬うことに尽きる。

若い頃は仏事に関心が薄くおざなりであったが門徒が二十年、三十年と練り返し仏さまの前に座ることによって、手を合わす姿が見え、莊嚴が整い、やがてその口から「南無阿彌陀仏」と念仏が出るようになった。そのご門徒は間違いなく如来様とのご縁で育てられたのである。仏事の功德であらう。

● 親鸞聖人の仏教との出遇い

二十年にわたる比叡山での修行の中で、親鸞聖人はいつでも、誰でも、どこでもその教えに遇えば救われていくという本當の仏教に出遇うことはできなかつた。その深い苦悩を抱き、六角堂へ百日間の参籠を決意する。九十五日目の明け方、感得し、その足で法然上人のもとに参られた。そしてまた百日間、教えを聞き続け、ついに「ここに本當の仏教がある」と、念仏の教えに出遇われた。念仏者親鸞の誕生である。そのことを『正信偈』には「本師源空明仏教」と高らかに謳われている。念仏によって開かれる仏事の原点がそこにある。



御伝鈔の拝読

子ども達による親鸞聖人御影（肖像画）が完成

昨夏、安芸南組子ども会で、子ども達による親鸞聖人の御影（肖像画）が製作されました。

パズル状になった御影のピース一枚一枚を二十四人の子も達力が合わせて一所懸命に描き、カッフルで大きな御影が完成しました。

現在、大西道誠様からご寄進いただいたパネルに入れ、別院本堂の入り口に展示中です。



広島別院団体参拝

左記の団体が団体参拝されました。お参りいただき、誠に有難うございました。

十二月十八日

東京教区東京四組 龍善寺様

真宗基礎講座 (第八回)

真宗基礎講座が十二月七日に開催されました。

講師の三明智彰先生は「承元の法難で越後に流された親鸞聖人は、越後の厳しい生活の中で毎日必死に生きる人々との出会いを通して、己の煩惱の深さをあらためて見つめ直していかれた」と話されました。

御寄進に感謝 「団扇彫物と御影保護パネル」

この度、芸備組西願寺住職の寺川大雅様から団扇彫物を、山陽教区門徒会副会長の大西道誠様から親鸞聖人御影(安芸南組子ども会製作)の保護パネルをご寄進いただきました。

ここに厚く御礼申し上げます。



団扇彫物 (だんせんほりもの)
本堂内陣の親鸞聖人と蓮如上人の御影の壇下などに飾る彫物です。

今回はお寺のハテナ?コーナーはお休みです

法座・講座等のお知らせ

2月22日(土) 真宗基礎講座

～親鸞の生き方にたずねて～
(第2シーズン)

- 【講師】 三明智彰 先生 (九州大谷短期大学学長)
- 【日程】 毎回 13:30～16:00 【会費】 500円
- 【次回】 2020/4/11(土)

〈親鸞聖人のご生涯をたずね、浄土真宗の教えの基礎を学ぶ講座です。〉



3月23日(月) 春彼岸会

- 【講師】 水野 元 先生 (安芸北組 妙蓮寺住職)
- 【日程】 14:00～勤行と法話 16:00 終了予定



＜彼岸とはさとの世界。昼と夜の時間が等しくなるお彼岸の時節に、
かたよりのない仏様の教えを聞く法会です。＞

毎月5日 定例法話 (ご今日の集い)

- 【講師】 県内僧侶(月替わり) 【日程】 14:00～勤行と法話(15:00 終了予定)
- 〈広島別院開基 教如上人の御命日(毎月5日)に法話会があります。〉

道場樹

【編集室より】

昨年、球界を引退した元広島東洋カープの梵英心選手がグロープには「邪見憍慢悪衆生」という親鸞聖人の言葉が刺繍されているそうだ。寺の住職を務める父上からカープ入団時に送られた言葉らしい。「人間の眼は煩惱により曇っている、常に自分を正當化し驕りたかぶる。結果、人としての歩みが止まる。だから謙虚に怠ることなく励め」という厳しいエールである。

先日、別院仏具のおみがきに参加した。一見それほど汚れているように見えないが、磨いてみると驚くほど汚れていることに気づかされる。皆で一所懸命に磨き上げたピカピカの仏具の輝きを見ると、清々しい気持ちになる。仏具は磨くほど輝く。

さて、私の心の曇りはどうであろうか。教えを聞くことで心磨かれ、いのちの輝きを放つのか、それとも聞法さえも自らの手柄とし、さらに驕り高ぶるのか。輝く仏具を見ながら考える。(H・N)